



立風書房

山田洋次作品集
4

山田洋次作品集 4



1979年11月10日 発行

¥ 1,300

山田洋次作品集 4

山田洋次

発行者——下野博

発行所——株式会社立風書房 東京都品川区東五反田3の6の18

振替——東京五—七四四九三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社／株式会社美術版画社

(乱丁本・落丁本はお取替えいたします) 0095—R6304—8909

山田洋次作品集

4

目次

家族 3

故郷 65

同胞 109

幸福の黄色いハンカチ 185

悪童 247

ビューティフル 261

私と統一劇場 264

解説Ⅱ島津清 高羽哲夫 268

装幀・多田進
装画・出川三男

家

族

脚 本	製 作	長女・早苗	長男・剛	祖父・源造	夫・精一	風見民子
宮崎晃	山田洋次	小角恒雄	三嶋与四治	瀬尾千亜紀	木下剛志	笠智衆
						井川比佐志
						倍賞千恵子

*

監原編照録美音撮

1970年10月24日封切	監督	集作	明音	術楽	影
	山田洋次	石井巖	内田喜夫	小尾幸魚	佐藤公信
				佐藤勝	高羽哲夫

第一章 故郷の島を離れる

伊王島・風見家の近く

菜の花の咲く春の伊王島。

タイトル——長崎県西彼杵郡伊王島。

海を見下ろす高台の上に朝日をうけてそびえる古い教会。

海岸線には、その美しい風景には少し不似合いな炭鉱の貯炭場や材木置場が広がっている。

精一の妻、民子が赤ん坊の早苗を背中に負って息をはずませながら坂道を駆け上がっている。

教会の見える丘の上にボツンと建っている小さな風見精一の家の前に、三、四人の近所の人達、それに近所に住む町役場の吏員、丹野

が旅姿の精一と長男の剛をかこんでガヤガヤしゃべっている。

丹野、民子を発見して、

丹野「奥さん、急がねば船に乗り遅れるよ」

民子「はい、どうも、内海さんにお米返しに行ったら、お婆ちゃんがどうしてもお茶飲んで行けて言うて……ほら、剛にお菓子ばもうて来たよ、こんげんたくさん」

精一「さ、早う出かけんば」

民子「すみません、お待たせして……あ、こんバケツ、春江さんの家に借りとった、返しとかんば」

主婦A「よかよか、あとで返しとくけん」

民子「じゃお願いします」

一同、荷物をそれぞれに持ってゾロゾロと歩き出す。

民子「あ、忘れとった」

バタバタと引き返し、縁先にかけてある二、

三枚の子供の洗濯物をとって来る。

一同、ゾロゾロ行きかける。

民子「あ、父ちゃん、あいはずしたね？」

精一「（うるさそうに）何ば」

民子「表札」

民子、再び引き返し、入口の表札をはずして
一同の後を追う。

畑の道

精一達をはさんで一同、一列になってゾロ
ロと歩いていく。

畑を耕す老婆に大声で挨拶をする民子。

民子「岩田のおばあちゃん、お世話になりました！
どうも」

墓地

十字架の墓の前にたたずむ老人——精一の父
源造。

下の道から民子が声をかける。

民子「じいちゃん、ゆくよ、余し時間のなかけん
ね」

源造、道のほうへ降りてゆく。

その向うに見える大きな炭鉱。

そのボッカリ開いた斜坑の入口から轟々とト

ロッコが列をつくって出てくる。

精一「じいちゃん、急がなば……」

民子、そのトロッコに乗った鉱夫に声をかけ
る。

民子「前田さん、さいならア、係長さんや村井の小
母さんらによろしう言うたって！」

鉱夫、ゆっくり坂道を上ってゆくトロッコの
上から手をふっている。

鉱夫「さよならあー。あんたも達者でなあー」

鉱夫の乗ったトロッコが坑道を下って消え
てゆく。

商店街

一軒の店の前でその家の主人達と挨拶あいさつをしている家族。

その傍で時計を気にしながら苛々いらいらしている丹野。

幼稚園の小使いのトシさんの引くリヤカーに荷物が積んである。

海の方から汽笛が聞こえる。

海

連絡船が近づいてくる。

波止場近くの道

家族一同、丹野、リヤカーを引くトシさん、それに見送りの数人が急ぎ足にゆく。

ゆきずりの人にいちいち挨拶をする民子とはかく遅れがちである。

波止場

棧橋さんばしに待ちかまえる十人ほどの見送り客のところへ、風見一家がゾロゾロとかけつける。

民子や剛つよしに餞別せんべつの金や品物を渡しながら挨拶する人達。

精一、民子、そして源造、胸をつまらせながら何度も何度も頭を下げている。時間を気にしている丹野。

丹野「さア、急がねば……船の出るけんね」

源造、精一をうながす。

源造「皆さんに早う挨拶ばせんば」

精一、顔を紅潮させ、大声を出す。

精一「あのう——どうもすみませんでした。今日は

ご丁寧にしてもろうて、私らも向うへ行ったら頑張りますけん、皆さんもお元気で」

見送りの老人が叫ぶ。

「風見精一さん一家、バンザイ」

一同、バンザイ、バンザイと叫ぶ。

突如、船のスピーカーが「螢の光」を流しはじめる。

船に乗り込んだ精一達の手にてーブが渡される。

もやい綱をはずす船員。

口々に何やら叫ぶ見送りの人。女はみんな泣いている。

汽笛が鳴る。

ゆっくりと岸を離れてゆく連絡船。

精一、ペコペコと何度も頭を下げている。刻々と離れ出す船の手すりにつかまり、必死に手を振る民子、ボロボロと涙をこぼす。

民子「どうもありがとう、ありがとう……さいなら、さいなら！」

源造、精一、民子、そしてその子供達を乗せた連絡船は、てーブを幾本も引きながら「螢の光」とともにグングン遠ざかってゆく。いつまでも手をふり続ける見送りの人達。

教会

黒衣の神父さんが手を振っている。

その小高い丘の上から青い海にてーブをひらめかしながら出てゆく連絡船が小さく見えている。

メイン・タイトル——「家族」。

長崎湾をゆく連絡船の上

——以下にクレジット・タイトル。

手すりにつかまり、海風に吹かれながらいつまでも遠ざかる故郷の島を見つめている一家。

船室の中の家族。

漁船に手を振る子供二人。

連絡船は神の島のマリア像を左手に見て長崎湾に入ってゆく。

船室の中で同船の顔見知りと語り合う精一。早速はしゃぎ回る剛。早苗のおしめをかえて

いる民子。

源造は黙然と窓の外を眺めている。

ポツポツと停泊中の外国航路の船が見え始める。

右手に石油タンクの群れ、やがて左手に世界一といわれる巨大な三菱造船所のドックが見える頃、大きなビルの並ぶ長崎の街はもう目の前である。

長崎の町

自動車のゆきかう広々とした道を、精一一家と丹野が歩いてくる。

町角

一同、立ち止まる。

丹野「そいじゃ……」

民子、遅れて来た源造に声をかける。

民子「じいちゃん、丹野さんここでお別れよ」

丹野「駅まで見送らんで悪かけばってん、十時まで

にどうしても県庁に行かんばいかんけん」

源造「どうもいろいろお世話になつて」

丹野「いいえ、何も出来んで……また、困ったことのあったら、なんでも手紙で言うて来てください……じゃ、皆さん身体に気いつけて……剛君……向うへ行ったら長崎の子はこんげんしかりしとるということば見せんといかんよ……」

民子「おうちもいつまでも元気でね」

丹野「ああ、亮太君に逢うたらよろしうな……おいは相変らず島で役場勤めばしとっけんてそう言うてくれんね」

精一「そのうち、また必ず逢えるばい」

丹野「ああ、錢ためてジェット機で遊びにゆくけん

……じゃ」

笑顔をのこして足をひきずりながら道を横切つてゆく。

精一達、駅の方へ向かつて行きかける背後か

ら声がかかる。

丹野「おーい！」

一同、ふり返ると道の向うに丹野が立っていて、何か、強い感動をこめて大声を出す。

丹野「みんな、頑張れよ、頑張らんばよ！」

言い捨てて急ぎ足に果庁の方へ向かう丹野を見ながら、民子、ふと涙ぐむ。

民子「よか人やったね……あん人」

長崎駅

長崎駅の構内をゆっくりと出てゆく博多急行列車。

スピーカーから「長崎ブルース」が流れていて、だんだん遠ざかって行く。

情景

長崎郊外の丘陵地帯を縫って走る急行列車、桜の花が満開である。

タイトル——一九七〇・四・六 長崎を離れる。

列車の中

一家、ほっとした様子で席に着いている。

車掌が検札に来る。精一の差し出した四枚の切符を見て驚く。

車掌「中標津……北海道の中標津まで行かれるんですか」

精一「はア」

車掌「そりゃ大事ですね、（切符にはさみを入れながら）で、福山までの方は？」

精一「（隣席の源造を差し）こっちです」

車掌「他の方は北海道ですね」

精一「いえ、私もいっぺん福山で降ります」

車掌「そうですか、一四時二六分小倉乗換えです、ご苦労様……」

近所の乗客、この会話にびっくりしている。

乗客「北海道ですか——はあ」

窓外の景色

大村湾の静かな海面が広がっている。

車内

赤ん坊にミルクをやる民子。

窓際でタバコをくゆらす精一。

隣席で源造が乗客と会話をかわしている。

男「北海道まで行くとですか」

源造「はい」

男「そや大変ですね……どんくらいかかったんですか」

源造「まっすぐ行って明後日の夜着くという話ばってん」

男「ほう……そいであんただけ福山で降りなさつと」

源造「はい、私は福山に次男がおりますけん、そこ

で降りるとです」

民子、精一に手伝わせて眠り出した早苗を椅子に横たえている。

男「北海道には転勤で行きなはつと、そいとも仕事ですか」

源造「いや、開拓村に行くんです」

男「ほう……開拓に……そいは大事ばい……」
と感心して精一達を眺める。

精一の家（回想）

夜。

つくろい物を中途に民子、「なかしべつ」と書かれたパンフレットを見ている。

一人遅い夕食を食べている精一、少し酔っている。

二部屋だけの狭い、家具らしい家具もない室内。

隣室に源造と剛達（つよし）が枕を並べて寝ている。

民子「開拓開拓いうても父ちゃんの夢のごといかんよ。今の仕事より何倍もきつかとげなよ。余りきつかつていうて逃げ出した人もおるいうけんね」

精一「逃げた奴もおるばってんが、亮太のごと、頑張った奴もおるやつか。悪か方ばっか考えるな」

民子「亮太さんは家が百姓やつけん、父ちゃんとは身体が出来が違うとよ」

精一「百姓じゃなか、酪農」

長崎本線・列車の中

不機嫌に窓外をみている精一。

精一の家（回想）

精一「自分の土地で自分で計画ばたてて、誰にでも使われず働く。今の仕事のごと、つまらんな請会社で係長に機嫌ば使うてあんげん希望のな

か仕事とは違う。おいには、今の仕事は向いとらん」

民子「今の仕事つとめが気に入らんなら長崎にでも行って探したらよかやかね、何でわざわざ苦労しに北海道まで行くとね。うちは百姓の娘やけんよう知とっと、百姓は辛か^{つら}とよ」

精一「百姓じゃなかと言うとるやろが」

民子「牛飼^{うし飼}いも百姓も苦労は同じやがね……」

精一、苛々^{いらいら}して大声を出す。

精一「ああ、もうやかまし^{おなご}か、女子がいちいち男の仕事に口出すな！ 寝ろ！ もうよか、おい一人で行くと」

列車の中

民子、ハンドバッグから出した銭別の金額を言い、精一は手帳につけている。

民子「新屋の正吉さん、千円、あそこのお婆あちゃん^{おばあちゃん}が五百円……役場の橋本さんが二千円もくれ

とつとよ」

精一「ほう二千円ね」

民子「うちね、水道代ば払うて来ておらんとよ」

精一「そげんたいした額やなかやろが」

民子「神父様が三千円もくれとつとよ」

精一「三千円ね」

民子「献金もしとらんとに、こげんことしてもうろ

て悪かったね」

精一「うん。次……」

炭鉱内の道（回想）

ブルドーザーが石炭の山を上って行く。

買物姿の民子が歩いてくる。

炭鉱の構内（回想）

作業服の精一、真剣な表情で手紙を読んでい

る。

その傍らに立っている、手紙を持って来たら

しい民子。

手紙を読み終えた精一、封筒に便箋を収め、

上気した表情で民子に言う。

精一「民子！ 亮太がおい一人でよかけん、いつで

も来いと言うとつと」

民子「……」

貯木場の道（回想）

昼食をとり家に帰る精一とその傍らを歩く

民子。

民子「どげんきつかっても……塩なめても、ボロ着

ても、寒か冬にたく薪がなかつても、それでも

父ちゃんは一人で行くとね」

精一「何べん言うても同じ、男が一ぺんきめたらも

う動かん」

民子「失敗しても後悔せんね」

精一「くどか女子ね、わいは……失敗してもとも

と、後悔ばするもんか」

民子「父ちゃん」

精一「何か」

民子「そんならうちも一緒にいくよ」

精一「あ?……」

民子「剛達とみんなで行こう、失敗したけんでもと
もっていう、そんげん中途半端な気持じゃ始
めから成功はせんけん、父ちゃんが本気ならう
ち達もいく」

精一「しかし……そんげんこと言うたっちゃ……亮
太の方が……」

民子「亮太さんは前から言うとなつたよ、開拓の仕事
は一人もんじゃ続かん、家族ぐるみでその気で
働かんば出来んと……ね、そうしよう、決めた」

スタスタと歩き出す。

精一「(慌あわてている)金ばどうするとか、金ば、汽車
賃だけで一万何千円もかかっとね」

民子「金なんかどうにでもなつさ、退職金やら、う
ちが炭鉱で働いたヘソクリやら、それに銭別も

二万や三万はあるやろし……」

風見家(回想)

夜。

民子、台所で晩ご飯の用意をしている。

精一、酒を飲んでいる。

孫の剛に本を読んでやっている源造。

精一、苛々して源造に言う。

精一「……父ちゃんはどんげん考えつとね、知らん

顔せんで何か言わんね……」

源造、ムックリ起き上がり、精一の方を向い
て坐る。

源造「おいの考えは簡単」

精一「あ?」

源造「民子の言うとおりますつとよか、お前より民子
の方がよう考えとる」

精一「(舌うち)すんなら父ちゃんはどんげんするつ
もりね」